

市場主義者の主張は マントラ（呪文）のたぐい

佐和隆光「市場主義の終焉」
(2000年10月, 岩波新書)

景気低迷が長期化する中、日本経済の「不治の病」を癒すには経済構造改革が必要であるということで喧伝されているのが日本経済の市場主義改革です。即ち、日本型制度・慣行を「アメリカ型」に作り替え優勝劣敗の市場競争を行わせることが日本経済を甦らせる唯一の方策であるというものです。

著者は、これら「絶対市場主義者」の主張を、「科学的な論証なり実証なりを一切経ていない」という意味で、マントラ（呪文）のたぐい」と断じています。例えば、「累進所得税制は勤労意欲を減退させる」との命題については、累進度が相対的に高い日本の勤労者は、それが低い米国の勤労者と比較して勤労意欲が乏しいことを統計的に実証する必要があるが、それは不可能だろうとしています。

また、市場主義という思想は目新しいものではなく、19世紀の英国において隆盛を誇ったものの、1920年代の世界的大恐慌の中、政府の市場介入を必要とするケインズによって否定された（「自由放任の終焉」）ものであったのが、1970年代に入り、オイルショック後の財政赤字の拡大、社会主義への幻滅といった事情を背景に、サッチャー政権・レーガン政権（我が国では中曽根政権）下で「復古」したものであることを指摘しています。

そして現在、市場経済化の動きは、グローバルな規模で更に進められつつありますが、著者によると、グローバルな「市場の失敗」は国内の「市場の失敗」よりも深刻であるとし、その理由として、「ルール違反を監視し処罰するWTOはあっても、国家間の初期条件の格差を是正するための措置を講じる『政府』に当たるものが存在しない」ことをあげています。また、WTOのルールは資本主義の「均質化」を求めるものですが、多様な資本主義が共存するためには「資本主義多元主義とでもいべき思想」の確立と「公正の公準」を明確化すべきであるとし、さらに、地球環

境問題への対応等も視野に入れつつ、「グローバル資本主義のガバナンスをつかさどる国際機関の創設」の必要性を指摘しています。

ただし、ここで留意しなければならないのは、著者は市場主義改革の必要性そのものを否定しているわけではないことです。それどころか、「日本の市場経済が不自由、不透明、不公正であることは、もとよりいうまでもあるまい」とし、それを自由、透明、公正なものにつくりかえる「市場主義改革の断行は何にも増して優先されなければならない」と強調しているのです。

その上で、市場主義改革を遂行し効率性を確保しつつ、公共性を重んじる公正な社会の実現を同時に目指すべき（市場主義と反市場主義を止揚する「第3の道」の追求）と言うのが、著者の主張です。

なお、大学を念頭に置いたものですが、社会科学研究者の存在意義についても言及があり、それは「政治や経済の現状への警鐘を専門的立場から打ち鳴らすことであって政府の政策を正当化することではない。その意味で、社会科学者は総じて現状批判的にならざるを得ない」としています。

(りえぞん No.11, 2002/1/23)

経済学は何とつまらない学問であろうか

飯田経夫著「経済学の終わり」
(1997年11月, PHP新書)

本書執筆中、友人にこのようなタイトルをつけるつもりだと話したところ、友人からは即座に、「それこそ（飯田経夫という）『経済学者の終わり』だ」と反対されたというエピソードが「あとがき」のなかで紹介されています。

我が国近代経済学界の重鎮の1人である著者は、この「鬼面人を驚かす」ような標題に何を託したのでしょうか。

著者は、近年、経済学者の多くが展開して